対馬民家のダイドコにおける空間構成と祭儀

民家建築の空間構成と聖性に関する研究 その1

THE STRUCTURE OF SPACE AND RITUAL IN "DAIDOKO" OF
THE PRIVATE HOUSES IN TUSHIMA ISLES

A study on the structure of space and holiness in private houses Part 1

松永 達^{*1}, 高見 敏志^{*2}, 北村 速雄^{*3}, 永田 隆昌^{*4}, 九十九 誠^{*5}Toru MATUNAGA, Takashi TAKAMI, Hayao KITAMURA,
Takamasa NAGATA and Makoto TUKUMO

The purpose of this study is to clarify the structure of space of private houses through the analysis of the relationship among the plans, the spatial elements and ritual.

This study examines examples of private houses in Tushima.

The summary of the results is as follows:

"Hirabasira-flat section pillars" were limited in use in "Daidoko" of the main house and "Koya" in Tushima. The arrangement of "Hirabasira" are considered to be determined by the holiness more than structural necessity for the following reasons.

- 1) "Daidoko" has the distinction not only as the center of domestic life, but also as the space for ritual.
- 2) The arrangement of "Hirabasira" is not equal and shows the directional nature based on the ritual in "Daidoko".

Keywords : private house in Tushima, structure of space, holiness, ritual, flat section pillar, directional nature

対馬の民家、空間構成、聖性、祭儀、平柱、指向性

1 序

本研究は、民家建築の空間構成を平面形および構成要素と祭儀との関わりをとらえて明らかにすることを目的とする。本稿でいう祭儀とは、主として年中行事および通過儀礼における民間信仰による祭儀を対象とする。

民家を生活領域の一つの構成要素と考えるとき、民家の建築的形態およびその空間秩序は、これをとりまく生活空間の全領域との関わりの中なかで考察し得る。

民家建築の成立要因は、次の2つの要因が考えられる。第一には、地理的環境要因であり、第二には、祭儀など人文的要因を挙げ得る。前者は、本島においても、民家の建築形態の中なかによく反映されているとみられる。

本研究で着目したのは、後者の民家における空間秩序に関する整序性の一つの発動要因としての祭儀である。

本島民家の空間秩序には、これをとりまく生活空間の領域との間に、ある共通観念が発動していると考えられる。この観念とは、本島固有の聖域をもつ中世初期に宗儀が完成した天道信仰¹⁾に関する祭儀である。

この天道信仰は、穀霊信仰、日神信仰を中心とする信仰である。その要所は、上島の佐護、下島の豆敷をその中心とし島内各地の山上、川辺、集落附近または集落内部に存在する。このような、みだりに入ることのできない聖地²⁾である祭儀空間が全島に分布している。天道山およびその他に分布する聖域が、本島における信仰の中心を示している。これらのことから、本島全域は天道山を中心とする天道信仰の聖的空間³⁾とみなし得る。このような地域のなかに主屋、板倉(小屋と呼んでいる)雑屋からなる民家建築が成立している。この主屋内部のダイドコおよび小屋に平柱(断面が偏平な柱)⁴⁾が設けられる。

対馬を研究の対象としたのは、以下の理由による。

- ①本島が離島という地理的環境にあるため、このような天道信仰が現在も存在している。
- ②生活の場(俗的空間)と天道山・シゲによる祭儀空間(聖的空間)とが対をなす状況など祭儀を含め、生活文化面に中世の遺制⁵⁾を残している。

^{*1} 読売九州理工専門学校建築学科 助教授・工修

^{*2} 西日本工業大学建築学科 教授・工博

^{*3} 西日本工業大学建築学科 助教授・工修

^{*4} 九州共立大学工学部建築学科 助教授・工修

^{*5} 西日本工業大学建築学科 助手

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Yomiuri Institute of Science and Engineering, Kyushu, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Nishinippon Institute of Technology, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Nishinippon Institute of Technology, M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Univ. of Kyushu Kyoritsu, M. Eng.

Research Assoc., Dept. of Architecture, Nishinippon Institute of Technology

以上のことから対馬が、本研究の対象として適していると考えた。このような地域の中に存在する民家建築は、この地域の聖性を反映した空間構成となったと考えられる。すなわち、本島の全域に存在する聖性が民家に影響を与えて顕現化し、祭儀空間として本島民家の空間構成を特徴づけてきたと考えられよう。こうして具現化された民家の平柱は聖性の象徴的形象⁹⁾として成立したものと仮説している。

2 既往研究と位置づけ

従前の民家研究は、各地域で調査された平面および構造形態を分析し、これらの編年並びに類型化をとおして、その変遷や発展過程を明らかにすることに主力が置かれていた。また、民家の建築的形態の成立に関する研究や空間秩序の分析についての研究も行われてきた。

民家建築の形態および空間秩序の成立要因としては、自然、風土など地理的要因および政治、習俗など人文的要因の2つが挙げられ、近年の研究では主として後者に着目されてきた。

民家の建築的形態の成立は、地域の地理的環境に歴史的な生活の蓄積を重ねた結果であり、前者をもとに後者が、重層的に関与していると考えられる。

本研究は、人文的要因のなかで、この建築的形態およびこれに内在する建築的空間秩序の構成要因として、生活の基層に存在する祭儀を対象とした点において、既往研究と相違する。

本研究に関連した既往研究としては、坂本磐雄氏の一連の研究(83, 5)⁷⁾がある。景観論の立場よりそれまで沖縄の民家において普遍的とされていた右一番座以外のものも対象として、沖縄の民家を家屋配置および方位をもとに集落景観に関する地域性を究明している。大岡敏明氏の一連の研究(86, 5)⁸⁾は、人文的諸条件を民家成立の契機としている。その平面構成の地域的相違は、自然、地理、風土的条件よりも人文的文化的条件⁹⁾により規定されることを明らかにし、さらにこれらの条件においては、重層的関係があるとしている。韓半島の建築に関して、西垣安比古氏の場所論的立場から、朝鮮のすまいについての研究¹⁰⁾がある。この研究では、『朝鮮のすまい』(86, 3)の「マル」(板間)に着目している。「すまい」を構成する象徴を体系的に論じ、朝鮮のすまいにおける「マル」は最上位の聖なる場所と説き、諸場所の関係を解明している。

広間型平面の性格および成立に関する研究として、大河直躬氏の『住まいの人類学』¹¹⁾および玉井哲雄氏の『近世における住居と社会』¹²⁾がある。大河氏は広間型を「前座敷三間取り型」と「広間型」に分類し、「広間型」については、祭壇が広間に主として設けられ、祭壇の位置およびその向きから広間と上手の祭壇のある部

屋との関係の緊密性ならびに儀礼・信仰との関係を示唆した。さらに対馬民家のダイドコの上部の梁組や周囲の戸棚を非常に立派に作ることは「家」の格式の表現とみなしている。

玉井氏は、畿内の村落社会における上層階級の住居様式である「前座敷三間取り型」と永井規男氏¹³⁾が明らかにした「撰丹型」とに多くの共通点を示し、両者の性格とその成立事情に共通性を認めている。祭礼・祖先信仰などの行事は「庭」で行われていたが、中世から近世にかけて庭に面した部屋でも行事が行われたとした。そして、広間型平面が広間と土間で行われる作業や行事により規定され、書院造風の部屋や前庭との関係は後から付加されたものとしている。

持田照夫氏、大河直躬氏の『日本の農家の四つ間取の研究——広間型の追求——』¹⁴⁾は、本島民家を広間型とみなしている。このなかで本研究に関連する視覚的効果の中で平柱や三尺間¹⁵⁾(チュウジキ、コドコとも呼ばれる)が設けられる居間(ダイドコ)が、農民社会における身分・格式をあらわす象徴的空間であったとしている。このような平柱や設備は、堅固さや重々しさを強調するような家の観念の視覚化とした。長崎県の民家報告書¹⁶⁾でも平柱については、家の立派さをほこるために用いられたとしている。

本研究では本島民家のダイドコの空間構成と聖性・祭儀との関連を実証しようとするところが以上の研究と異なる。

建築における聖性の存在については、玉腰芳夫氏の「古代の家」¹⁷⁾において、『家なる空間の本質は、現代と異なって、聖なる空間ということになる』とし、「建築を聖なるもの」と位置づけている。この研究は、民家における聖屋的観念を示し、本論における民家建築の空間と聖性との関係に示唆を与えた。

本研究は、建築空間の成立に関わる人文的要因の一つである祭儀と民家建築の空間構成との関連の解明に主力を置いた研究であるところに特色がある。本研究のもう一つの意義は、従前の民家建築の研究方法では、解明し得なかった前時代(中世)の形態的・計画的側面を推定する手がかりが得られるところにある。

3 研究方法

以上の研究目的に立脚して、本稿では次の2つの項目について実証的に考察し、本島民家の空間構成を明らかにする。

①ダイドコの空間の性格と祭儀

②ダイドコと各部屋との空間相互の関係と祭儀

①では、本島の民家の空間的性格として、そこに天道における聖性の顕現とみられる祭儀空間の存在を実証した。

②では、主屋の平面形および構成要素を対象として空間相互間の関係を検証し、本島民家の空間秩序を祭儀との関連において考察した。このため、ダイドコの平柱に着目し、次の二つの要素をもとに平柱の分布傾向を指向性という概念で、祭儀との関係を考察した。

A) 平柱の分布傾向¹⁸⁾と祭儀

B) 平柱の分布上の指向性と祭儀

A) では平柱の分布比率によって、ダイドコ内部での指向性の強弱を顕し得ると考えた。

B) では、ダイドコの各壁面における平柱の向きを、ダイドコ内部および隣接する空間への指向性と捉らえた。この二つの点よりダイドコの空間構成と隣接する空間の関係を明らかにした。

4 調査方法

現地調査は、表-1のように4回実施し、主屋および小屋の現状の平面構成と平柱の分布状況、配置、断面の実測調査および祭儀に関する聞き取り調査を行った。収集した図面は現状図である。収集した平面形および構成要素を検討すると、本島民家のダイドコは大きな変化はなく、祖形を保っていると考えられる。このことは長崎県の民家報告書¹⁹⁾に確認できる。祭儀に関する調査では、ホタケ²⁰⁾、コウジンなどの祀られている位置および神体の確認ならびに年中行事に関した聞き取りを行った。参考にした史資料としては、長崎県の民家報告²¹⁾ならびに野村研究室²²⁾による調査資料を主に用いている。

5 対馬民家の特徴

対馬民家は基本的に主屋、小屋、雑屋からなる。小屋は敷地内部に設けられる場合、敷地外部に点在する場合、集落の一部に群倉として設けられる場合があり、3種類の配置形態がみられる。いずれも主屋とは別棟である。

表-1 現地調査および資料

調査	調査戸数	調査内容	調査年月
現 地 調 査	第1回	配置図 : 4戸 主屋の平面図: 12戸 断面図 : 1戸	1980年8月
	第2回	配置図 : 10戸 主屋の平面図: 11戸 小屋の平面図: 4戸	1981年8月
	第3回	配置図 : 1戸 主屋の平面図: 5戸 断面図 : 1戸	1985年8月
	第4回	祭儀に関する聞き取り調査	1991年8月

本島民家の基本的平面構成は、図-1のようにダイドコ、ナンド、ザシキ、およびドージの4つの要素から成り、平入である。最も広い部屋がダイドコである。このダイドコは、主屋のほぼ半分を占め、下手に設けられる。ザシキ、ナンドは、主屋の上手の表と裏にそれぞれ設けられる。ダイドコの下手表方にドージとよばれる間口、奥行ともに1~1.5間程度の土間が設けられている。したがって、本島の民家では、一般の民家のように主屋内部に作業用の土間はない。このため、ペー、カドおよびツシロとよばれる作業場や乾燥場および雑屋がその作業場の用途に使用されている。

ダイドコのA面には戸棚、仏壇が設けられる。仏壇は、壁面中央もしくはナンド寄りに設けられる。A、D面の隅部の柱上部にホタケが祀られる。B面にはナンド、ザシキの出入口が設けられる。B面中央部に小床である三尺間が設けられる。この三尺間は仏壇、戸棚として使用され、また正月には山の神、テガキ²³⁾が祀られる。C面にはドージが設けられ、これに接してサンジョウが設けられる(図-2)。サンジョウとドージとの間に大黒柱が建つ。D面は外壁となる場合とダシ(炊事場)が設けられる場合がある。

図-2は調査家屋の実例である。これによると、主屋内部に作業用の土間はなく、イロリを中程に設けたダイドコが主屋の下手の半分を占める。A図では、このダイドコを中心としてドージ(土間)、サンジョウ、ザシキが表面にならび上手の裏にナンドが設けられている。

B図では、サンジョウに接してヨリツキ(式台)が付けられている。かつて、ヨリツキには屋根を葺き下ろし、斗組をほどくなど、身分・格式を表現した。B図はA面に比し、畳敷きのツギノマ、オクノマ、トコノマなどの座敷部分が発展した形となっている。また、ダイドコの正面に仏壇や戸棚が設けられるが、仏壇はダイドコの上手の三尺間に接して設けられる場合もある。両図ともダイドコに平柱が設けられ、下手裏の柱上部にホタケが祀られている。

以上のように本島民家のダイドコは祭儀空間として、重要な位置をしめていることがわかる。

図-1 平面の基本型

6 ダイドコの空間構成

6-1 ダイドコの性格と祭儀

本章では、ダイドコに設けられた平柱の構成と祭儀との関連を分析し、ダイドコの性格および主屋全体に対するダイドコの空間の性格を考察する。

1) 平柱の構成上の特質は、次のようである。

- ①対馬民家の特徴である平柱は、主屋のダイドコおよび小屋の身舎部分の周壁に特定して使用される特質がある。(図-3)
- ②平柱の配置は、ダイドコでは四周の壁に使用され、小屋では、四隅を角柱とし、それ以外を平柱とするのが基本である。
- いずれも平柱は石場立とし、軒桁にたっており、軒桁以下の構造は同じである。
- ③小屋は穀倉としての性格がつよく、小屋において平柱を使用する構造的、意匠的な必要性は主屋に比して少ないと考えられる。ゆえに、小屋の平柱の使用は聖性の顕れと考えられよう²⁴⁾。

2) 平柱とする形態上の必然性としては、民俗事例としてイヤ(産後の胎盤)処理²⁵⁾があげられる。イヤを神霊の宿る特別の木²⁶⁾(大きな松の木)の下に埋める習俗がある。子供の具合が悪いと地面に近い床下の柱にくくりつけることも報告されている。このように、イヤは子供に影響を持つものと考えられ、子供の成長はイヤ処理のよしあしで決まると考えていた²⁷⁾。本島では、柱に必要以上に太い松材を用いることが多い²⁸⁾。このようなことから本島では、大きな松の木を象徴して見付けが広い平柱を用いる慣習が顕れたとみられる。これは、祭儀性の顕れと考えられる²⁹⁾。

3) 年中行事からみた本島民家の空間構成上の特質は、次のようである。(表-2)

- ①ダイドコは、正月行事や生産に関連する農耕神を主と

した祭儀が行われる。

- ②ザシキでは、盛大に行われる盆行事にミタナ³⁰⁾(盆棚)セガキが祀られ、仏教的行事が主である。仏壇は日常の礼拝として、ダイドコのAまたはB面に設けられる。しかし、盆行事ではザシキのミタナへ位牌、供物が移動され公式な仏教行事はザシキで行われる。

- ③ナンドは、仏教伝来以前の御先祖³¹⁾だとも伝えているウチノカミ(祖先神)が祀られる。

・長崎県文化財指定申請書(1976)より転載・飯原町権根

図-3 小屋の平面図および平柱

使用設備	年中行事
ダイドコ	ホタケ(正月)・コウジンサマ ^{※1} (正、5、9月)
イロリ・クド	カケモン ^{※2} (正月)・コウジンサマ
二尺間	山の神 ^{※3} (正月)・テガキ ^{※4} (正月)
ドーシ	カケモン(正月)
タシ	カケモン(正月)
大黒柱	七世かゆ ^{※5} (正月)
ザシキ	コノマ お日侍 ^{※6} (正月)・地主様 ^{※7} (6月)
ミタナ	神人の下宿 ^{※8} (7月)
エンガワ	ミタナ ^{※9} (7月)
ナンド	ウチノカミ ^{※10} (正、5)
敷地内部	屋敷神 ^{※11} (6月)

- ※1: コウジンは、ホタケと同じ神であるところもあるが、本来ホタケは農耕神である。本島のコウジンは崇る神、荒ぶる神である。³²⁾
- ※2: 魚、野菜などをつるした年なわ。
- ※3: 天道信仰でも聖地信仰でも、崇拝の対象が山である場合が多い。山の神信仰は山岳信仰の一つの現れであるが、神社信仰よりはるかに日常生活に密着している³³⁾。
- ※4: 年賀の客をもてなす飾り³⁴⁾。
- ※5: 大黒柱の下にまな板、包丁、するこぎ、しゃくしを持って行き、かゆを作って³⁵⁾。
- ※6: 各伊勢詣ごとに赤飯を床の間に供える³⁶⁾。
- ※7: 六月土用中各戸で草を七たば束ねて、床の間に供えまつてから、これを地主様に供える³⁷⁾。
- ※8: ザシキやツギノマの床の間または神入の下段に二段の組み立ての欄に祖先の位牌や供物を飾る。かつてはテボ、飯台、机などを並べて兩戸を1枚のせて作った³⁸⁾。
- ※9: 縁側にセガキだなを作り、位牌を飾る³⁹⁾。
- ※10: 祖先神
- ※11: 屋敷の隅に祠を作り祀る。

A図 (N0:25)

B図 (N0:34)

図-2: 現状平面図 (N0:表-3, 表-4の番号と符合する。)

このように主屋および敷地内部で行われる年中行事は、その大半がこのダイドコで行われる。ダイドコおよびナンドで行われる祭儀の内容は、農耕神をはじめ民間信仰を主とした祭儀である。これに比して、ザシキでは仏教行事が主である。本島民家の空間構成は、このような二元的構成がみられ、ダイドコとザシキとは祭儀的空間認識に相違がみとめられる。

以上の1)～3)より本島民家のダイドコは、空間構成上の中心をなすとともに祭儀に関わる年中行事および祭儀の設備が重点的に施されており、平柱と聖性・祭儀との関連を指摘できる。

平柱は、平田篤胤の「皇國制度考・上⁴⁰⁾」によると本島以外にも広く分布していたと考えられる。しかし、本島のように平柱が集中的に分布している事例は珍しい。

本来、構造的には角柱での処理が可能と考えられる。しかし、本島において、聖屋性をもつ小屋ならびに主屋のダイドコに特定して、これだけ平柱が使用されるところに祭儀との関連を示唆し得る。構造的処理より祭儀との関わりにより必然性があつたと考えられる。したがって本島民家のダイドコの平柱は聖性を顕現し、聖性の象徴的形象と考えられる。

6-2 ダイドコにおける平柱の分布と祭儀

次に、ダイドコの平柱の分布傾向が示す指向性について検討し、これと祭儀との関連を考察する。

1) ダイドコの平柱の寸法と分布

平柱の断面形態を図-4に示した。平柱は、表-3に示すように約56×14CMから19×9.5CMとかなりの幅がある。見付けと見込の比率をみると、1.7から4倍となり、平均比率は2.35となる。

ダイドコの四周壁面上での平柱の配置は、A壁面を三～四分分割するものが多く、C壁面では、大黒柱がドーシ寄りに建ち、平柱の使用は少ない。梁行き側のB、D壁面では、三つ割りする傾向が強い。平柱の柱間寸法に規則性はみられない。

2) 平柱の分布傾向と祭儀

ダイドコ周壁の平柱の分布状況は、表-4に示した。各壁面単位でみると、平柱の配置は均一ではなく、分類の2面と3面とで約88%が設けられている。2面型では、形態2)のA・B面型が最も多く、A・D面型がこれに続き、この二型で約8割をしめる。

3面型では、A・B・D面型が23戸(74%)と最も多く、A・B・C面型が、7戸(23%)と続き、この二つの型で約97%になる。

各壁面ごとにA面、B面、D面、C面の順となり、正面性(A面)、側面性(B、D面)、表面性(C面)の順に平柱が多く設置されている。

二面の壁面の組合わせでみるとA・B面、A・D面、

B・C面、C・D面、の順となる。

以上から、平柱の配置はA壁面の正面性およびA壁面・B壁面の交差部が強調され、C壁面ならびにD壁面が弱い配置となっている。

一方、ダイドコの周壁に施された意匠、生活形態ならびに祭儀については次のようである。

①A壁面には仏壇や戸棚が設けられ、正面性を強調した意匠となっている。

②B壁面には三尺間が設けられ、ナンド、ザシキが隣接し、ナンド⁴¹⁾には「ウチノカミ」が祀られ、聖性がみられる。

③C壁面に出入口(ドーシ)が設けられ、表にあたる。

④D壁面は、下手の妻側にあたり、給人層では、炊事機能としての「ダシ⁴²⁾」が設けられ、「ホタケ」が祀られ、聖性がみられる。

以上から、平柱の配置傾向はA面を最も強調し、側面B、D面がこれにつづく。このことは、祭儀意匠に関する空間構成と隣室の聖性・祭儀とが関連した結果と考えられる。

表-3 平柱の形態

NO	X x Y(mm)	比率(X/Y)	所 在
2	330x145	2.28	鹿児島県久根田舎
9	315x125	2.52	鹿児島県久根田舎
11	225x135	1.67	鹿児島県久根田舎
12	260x125	2.08	鹿児島県久根田舎
13	280x128	2.19	鹿児島県久根田舎
14	330x128	2.58	鹿児島県久根田舎
15	370x132	2.80	鹿児島県久根田舎
16	280x140	2.0	鹿児島県久根田舎
22	288x136	2.12	鹿児島県久根田舎
25	560x140	4.0	鹿児島県久根田舎
26	385x150	2.57	鹿児島県久根田舎
34	192.5x95	2.03	鹿児島県久根田舎
35	240x120	2.0	鹿児島県久根田舎
36	240x140	1.71	鹿児島県久根田舎
37	220x130	1.69	鹿児島県久根田舎
39	320x125	2.56	鹿児島県久根田舎
40	320x125	2.56	鹿児島県久根田舎
41	300x150	2.0	鹿児島県久根田舎
42	260x140	1.86	鹿児島県久根田舎
43	260x140	1.86	鹿児島県久根田舎
44	400x110	3.6	鹿児島県久根田舎
45	470x120	3.92	鹿児島県久根田舎
46	300x125	2.4	鹿児島県久根田舎
47	245x130	1.88	鹿児島県久根田舎
48	300x120	2.5	鹿児島県久根田舎
57	290x135	2.15	鹿児島県久根田舎
平均	306.9x130.3	2.35	

X:長手方向の断面寸法 Y:短手方向の断面寸法
以下のものは、平柱の分布は確認できるが、そのX×Yは確認できなかった。

*-a:1, 4~8, 10, 21, 24, 32, 33, 55, 56

*-b:3, 17~20, 23, 27~30, 49~54, 58

鹿児島県久根田舎:31

位田所:38

*-a:長崎県教育委員会 長崎文化財調査報告書 第12集(前編)『長崎県の民家』長崎県民家調査報告書 昭47

*-b:九州産業大学工学部 建築学科 野村研究室 昭56, 4調査
NOは表-4の()の番号に対応する。

図-4 平柱の断面形態

3) 平柱の分布上の指向性と祭儀

本項では、ダイドコの平柱の分布傾向と祭儀との関係をもとに、この平柱の向きによる指向性という概念を導入して、ダイドコに隣接する空間の祭儀性との関連を考察する。そこで、ダイドコの各壁面上での平柱の分布状況(表-4)を、次の二タイプに分けて分析した。(表-5)

(I) 平柱が壁面の中央部に分布し、かつ端部の平柱の見付け方向が壁面方向を向く場合。

(II) 平柱が壁面の中央部にのみ分布し、端部には平柱が存在しない場合。

上記の二タイプのもつ指向性は、以下のように捉えられる。

(I) 型は各壁面からの中心部への指向性(正面性)および壁面方向(隣接する空間)への指向性として捉えられる。

(II) 型は各壁面から中心部へのみの指向性の存在と捉えられる。

ダイドコの周壁における各指向について、表-4の分布状況より図-5に戸数比を求め指向性を図示した。これより、次のことがいえる。

周壁面における全要素(各壁面の中央部・端部)を対象とし、ダイドコ全体のなかでの指向性を考察する。

全指向性のうちA(N)(25.0%)が最も高い指向性を示している。すなわち、ダイドコ全体においてA壁面からの正面性が、強調された構成といえる。このことは、ドージ、ヨリツキからの正面性の意匠を強調したものと考えられる。B(N)(21.0%)がこれにつづき、ダイドコ内部でのA(N)につぐ正面性の意匠とみられる。このことは、三尺間が設けられるB壁面に隣接する部屋の祭儀性を顕現したものと考えられる。

以上より、ダイドコの平柱の分布上の指向性は、A壁面、B壁面の異なった性格による正面性がともに強調された表現となっている。すなわち、祭儀性によるB壁面の正面性とドージからみた生活上のA壁面の正面性との二重の正面強調構成がみられる。

さらに、隣接する空間への指向性としては図-5に示すように、A壁面からB壁面へ方向としてA(B)(10.7%)と最も高い数値を示している。これは、B面裏側への指向を示したものと考えられる。一方、C壁面からB壁面方向のC(B)(0.9%)は、低い数値を示す。このような、B壁面の表と裏側における平柱の指向性の差異は、B壁面に隣接するナンドとザシキの祭儀性の差異^{4,3)}によるものと考えられる。

7 結

対馬全島に存在する聖性が民家の空間構成に影響し、民家の空間構成はその聖性の象徴的顕現であろうと仮説

を置いて、対馬民家のダイドコに特定して使用されている平柱の配置に特に着目して、聖性・祭儀との関連を考察してきた。

平柱は、主屋ダイドコおよび小屋の周壁に特定して用

表-4 平柱の分布状況別分類

分類	形態	内容	合計
1 面	1)	3戸/54戸=5.17%	3戸
2 面	1) 2) 3) 4)	6戸/54戸=10.34% 11戸/54戸=20.37% 2戸/54戸=3.70% 1戸/54戸=1.85%	20戸
3 面	1) 2) 3)	7戸/54戸=12.59% 1戸/54戸=1.85% 23戸/54戸=42.59%	31戸
4 面	1)	4戸/54戸=7.41%	4戸

- ・ 実線：平柱が存在する壁面
- ・ 破線：平柱は存在しない壁面
- ・ ()：表-3のNOに対応する。
- ・ 便宜上具体例の向きは左勝手とした。

表-5 平柱の分布型と指向性との関係

分布状況別分類(表-4)の凡例および指向との関係
斜線は、壁面端部の平柱または角柱を示す。

壁面のタイプ	凡例(表-4)	壁面における指向	指向の内容
(I)	・ 平柱が、壁面中央部に分布する。 ・ 端部の平柱が、壁面方向を向く場合。 	端部 中央部 端部 壁面方向への指向 隣接空間への指向 中心への指向	・ 中心部(正面性)への指向を示す。 ・ 端部(隣接空間)への指向を示す。
(II)	・ 平柱が、壁面中央部に分布する。 ・ 壁面端部には、平柱が存在しない場合。 	端部 中央部 端部 中心への指向	・ 中心部(正面性)のみの指向を示す

図-5 平柱の指向性

いられており、構造的必然性よりは聖性の顕現とみられる。このように判断した主な理由は、以下のとおりである。

1) ダイドコは、以下より生活の中心的機能をもつとともに祭儀空間として性格づけられる。

①ダイドコは、祭儀性の象徴的形象として体系化された空間構成であったこと。

②年中行事からもダイドコは祭儀空間としての性格が強いこと。

③平柱が聖屋性のある小屋と同様にダイドコの周壁に設けられていたこと。

2) 本島において多用する平柱の形態的必然性としては、イヤ処理や子供に関わる習俗にみられる祭儀と関連づけられる。

3) ダイドコの平柱の配置は均等でなく、次のような強調した分布となっており、祭儀との関連と共に祭儀性の指向性を顕しているといふことが得られる。

①ダイドコが、日常の生活形態やドー、ヨリツキによる平入に対し、A壁面の正面性を強調した平柱の配置となっていたこと。

②B壁面からの中心への平柱の指向性は、A壁面につぐ正面性を強調した分布となっており、隣室の祭儀性の影響とみなし得たこと。

③A壁面ではB方向に平柱が最も強調された配置となっており、これに対してC壁面上手方向では、低い分布となっていた。これは、B壁面上手のナンドのもつ祭儀性の影響とみられたこと。

④下手側面(D面)、表壁面(C面)では、平柱の配置は少なく、ダイドコ正面(A面)と上手側面(B面)との対比が鮮明な配置となっており、ダイドコ全体において偏った空間構成となっていたこと。

以上の諸点より、ダイドコにおける平柱の使用およびその配置構成は、構造的必然性より生活の場としての正面性および祭儀に関連した構成となっているといえる。つまり、ダイドコの空間構成は民間信仰による祭儀と身分、格式による正面強調との重層的表現と結論づけられる。

以後、本稿で取り扱えなかった小屋における平柱と聖性、集落構成と聖性・祭儀との関連については、稿を改めて考察したい。

参考文献

- 1) 永留久恵：海神と天神 白水社 1988
- 2) ミルチャ・エリアーデ：聖と俗 法政大学 1990
- 3) 野村孝文：南西諸島の民家 相模書房 1976
- 4) 九学会連合対馬共同調査委員会編：『九学会特別調査報告』 1954
- 5) 宮本常一：日本の薩島 第一集 宮本常一著作集4 (未来社) 1980

6) 長崎県教育委員会：長崎文化財調査報告書 第12集 (前編) 『長崎県の民家』 長崎県緊急民家調査報告書 1972

7) ミルチャ・エリアーデ：聖なる空間と時間 ミルチャ・エリアーデ著作集 第二巻 セリカ書房 1990

8) 持田照夫氏、大河直躬氏：『日本の農家の四つ間取の研究 ― 広間型の追求 ―』 (財)新住宅普及会住宅建築研究所報 1978

9) 鈴木東三：対馬の神道 三一書房 1972

10) 新対馬島誌編集委員会：新対馬島誌 1964

11) 対馬郷土研究会：対馬風土記 13号 1976

12) 対馬郷土研究会：対馬風土記 14号 1978

13) 平田篤胤全集刊行会：皇國度制考・上 新修平田篤胤全集補遺3 名著出版会 1978

14) 柳田國男：定本柳田國男集 第三十一巻 筑摩書房 1978

注記

- 1) 文献1) P358に詳しい、「天道信仰の本質は、この穀霊信仰、日神信仰を核として、祭祀の形式は雄神(御子神)と雌神(母神)を配祀している所が多いことにある。」同じくP360に「室町前期にはすでに天童伝説が固定していたことは確実である。」としている。
- 2) 文献1) P144：「上県佐護の天道山は、雄嶽と雌嶽の両峰があり、南を雄嶽、北を雌嶽、下県豆敷の天道山(竜良山)にも雄嶽(雄竜良)と雌嶽(雌竜良)」を中心として、また「天道祭祀(聖地)は山上(山中)にある例と水辺にある例が多い、山上は御子神の祀、水辺は母神の祀、嶽之神は御子神、水辺の神は母神という祭祀の形態が天道信仰の基本形式であった。」とし天道による聖地は、全島に分布している。その他にシゲ地とよばれる聖地が存在する。
- 3) 文献2) P30：「山もまた天と地の交流を表す象徴の一つとして現れる」また「山もまたかくて世界の中心を具現している。」ことを説いている。本稿では、この山を豆敷、佐護の各天道山を聖域の中心とし、これとの関わりにおいて生活空間のなかに祭儀性が成立すると考えている。
- 4) 文献4) P337：この名称は、本島の民家の主屋および小屋(倉)の周壁に設けられる。断面が扁平な柱を平柱とよんでいる。
- 5) 文献5) P247：「社会組織のなかに中世の遺制を受け継いでいる」としている。この中世の遺構は、現在でも本島の村落組織のなかに、かつての給人、本家、分家として日常生活のなかにもいきている。また、祭儀面では天道信仰が重要事として存在しており、この遺制の一つといえる。
- 6) 文献7) P176、P181：「この聖性の顕現または、その延長により事物が象徴として形象化が行われる。そして、この形象化された事物は、統合化され、体系化される。」本稿では、外部の天道の聖性が、民家内部へ延長され、これを形象化したものであり、本島民家の建築的形態として成立し、形象された建築は、象徴として体系化されると考えている。
- 7) 坂本磐雄：「沖縄の集落景観における平面形態の構成に関する研究」 1983,5 日本建築学会論文報告集 第327号 この研究では、分析基点を自然方位ではなく東方尊重を基本概念とし、沖縄の民家の普遍性の高い一番座に着目して、ヨコ軸「上手下手」、タテ軸「前面背面」の二軸を分析軸としている。
- 8) 大岡敏明：「旧藩領域からみた江戸時代後期～明治期における農民住宅平面構成の地域的相違に関する実証的研究」 1986,5 日本建築学会計画系論文報告集 NO363 江戸時代の農民住宅の平面構成を地域間(藩領域)においてその構成の相違を文化圏域としての旧藩領域にその契機を求め、五地域(九州、東北、近畿、北陸、中部地方)の27藩にわたり実証的に検証している。
- 9) 注8)：その藩の家作規則、武家住宅、農業形態と生産力、伝承慣習行事、藩内の諸政策と支配体制、そして隣接する藩と藩の関係などに規定されるとしている。
- 10) 西垣安比古：「朝鮮のすまい」―象徴体系の構造論的研究― 人文学報 第60号 1986,3 京都大学人文科学研究所
- 11) 大河直躬：「住まいの人類学」日本庶民住居再考 1990,10 平凡社
- 12) 玉井哲雄：「近世における住居と社会」日本の社会史 第8巻 生活感覚と社会 1988,12 岩波書店
- 13) 永井規男：「摂丹型民家の形成について」1977,1 日本建築学会論文報告集第251号 この研究では、摂津西部地方における民家の平面および立面型の成立を人文的要因としてこの地方の歴史的政治体制にこの型の成立契機を求めた研究である。
- 14) 文献8)

- 15) 三尺間の形態および発展過程は、文献6) P27 に詳しく示している。また、持田照夫、大河直躬：「日本の農家の四つ間取の研究 ―広間型―」（財）新住宅普及住宅建築研究所報 1978 の追求 P175では最初は簡単な形態から複雑化し居間のなかでも上手の一番象徴的位置にあるとしており身分、格式を現す社会的意味を示してた。そして、本論ではこの三尺間に山の神、テガキなどの民間信仰における祭儀設備として成立することは、ダイドコが祭儀空間として成立する一構成要素であるにとらえた。
- 16) 文献6) P22
- 17) 玉腰芳夫氏：「古代の家」―場所の研究― 1972, 8 日本建築学会論文報告集 第198号
- 18) 文献2) P20：「聖体示現は空間の均質性を破り、一つの<固定点>を露わす。」、P13では「およそ方向づけというものは、一つの固定点を前提とする」としている。本論では、この固定点を外部における天道の聖地として考えている。この聖性は、固定点としてダイドコに祀られる『ホタケ』を依り代とし主屋内部での顕現により祭儀空間として成立するにとらえている。ここに、祭儀空間内における空間相互の関係は指向性の概念の導入により明らかにしようと考える。
- 19) 文献6)
- 20) 文献4) 和歌森太郎、櫻井徳太郎 P341：「全島いづれの村を訪れても、この神を祀らない家はない」と報告されている。文献1) P149：「これを天道信仰の家庭内祭儀」また「家庭内祭儀の中心はホタケサマである」と論じている。このように、天道の別姿とし全島に祀られながらもホタケは、農耕神として生活のなかにねざし、また表面化しにくい神として観念されている。文献11) P29：ホタケの神体は、「ダラの木を十字に割（門松に供えてあったもの）ヨシの穂と茎を一、二本づつはさみこむ」また現地調査では弓、矢、御幣の型を稲穂、ヨシ、ラダの木および麻糸で作っていた。
- 21) 文献6)より主としてダイドコ周壁の平柱の分布状況、13戸を参考にした。
- 22) 野村研究室 九州産業大学 工学部 建築学科 1981, 4調査：主としてダイドコ周壁の平柱の分布状況、17戸を参考にした。
- 23) 表-2の注記に示している。
- 24) 本島に於いては、板倉を小屋とよび、いわゆる雑屋ではない。この小屋は、ヒョウモンゴヤ（俵物）、イショウゴヤ（衣装）などに使われ、家財の収納から収穫物の格納まで種々の目的に用いられる倉である。本島的小屋は、ペー、カドおよびツシロと呼ばれる作業場、乾燥場をもつ場合が多く基本的には穀倉である。この穀倉に関して、文献3) P247に稲作民族において穀倉が、聖屋として尊重されていたことが指摘されている。本島的小屋は正月にコッバラ（山中から子供らがネムの木を迎えて祝棒を作る）を供えなど（文献11）：P28）、小屋の聖屋的観念がうかがわれる。
- 25) 文献11) P11 峰町津柳：「大きな松の木の下に穴を掘り、線香・塩と一緒に白い布で包み埋める。子供の具合が悪いとイヤを掘り出し海で洗って家のスナコ（床の下）の柱にくくりつける。」
- 26) 文献12) P53
- 27) 文献11) P14
- 28) 文献8) P168
- 29) 柱の聖性については小口偉一、堀 一郎監修：宗教学辞典 東京大学出版会1989, 1 「柱と棒」のなかで記されている。
- 30) 文献12) P59
- 31) 文献4) P341
- 32) 文献9) P214
- 33) 文献4) P349
- 34) 文献10) P627
- 35) 文献10) P589
- 36) 文献10) P593
- 37) 文献10) P611、文献1) P148：「対馬の旧家で仏壇の他に祭祀があるのは、外の地主様（屋敷神）と内のホタケサマだけである。観音様や太子様などの念持仏もあるがそれらは、一般的でなく、お伊勢様の棚を設けたのは新しい。家庭内祭祀の中心はホタケサマだったのである。」としている。
- 38) 文献12) P59
- 39) 文献10) P611
- 40) 文献13) P417~420 文化十四年(1817)に発掘された家屋と平柱（幅：一尺一寸、厚：三寸、長：六尺二寸）とおもわれる構成部材が、描かれている。年代は、不明であるが家屋とともに「柱簀」とされるものが出土している。これらについて内田武志編 東洋文庫「菅江真澄隨筆集」P259で解説されている。
- 41) 文献4) P340, 341：「対馬では家内を守る神をいっばんにウチノカミとよんでいる。」また、「このウチノカミとは、佛教傳來以前の御先祖だとも傳えている（豊）。」と報告されている。小口偉一、堀 一郎監修：祖先崇拜（日本）【氏神・稲霊との関係】宗教学辞典 東京大学出版会 P515 では「柳田国男は民俗学的立場から（中略）農神は家の祖霊の別姿であり、盆に各家に迎え祭られる御精霊様（おしよらいさま）と本体は同じである」としている。文献14) 倉稲魂考 P166：「主婦の子を生む場所と稲の種の管理せられる小さな一室とが弘い地域に互って以前から同じであった。（中略）納戸は、なほ二つの貴とき靈魂の聖地であり」とされている。本島での祖先神であるウチノカミを多産豊穣にかかわる神として祀られるナンドは、主屋内部においてダイドコと同様に聖性の顕現した祭儀空間としてとらえることができる。
- 42) ダシは、ダイドコの妻側を炊事場として使用される部屋である。
- 43) ダシキは、畳や床の間を設けるなど身分・格式を主とする空間と共に仏教的要素を含んだ空間にとらえられる。一方、ナンドは注41)においてダイドコと同様に民間信仰を基とした祭儀空間として捉え得る。ここに両空間の性格の差異が存在する。

(1993年7月9日原稿受理, 1994年1月31日採用決定)